

くるみ割り人形とネズミの王様

『子供のための童話集』

『セラピオン同人集』

Nußknacker und Mausekönig

„Kinder-Mährchen“ 1816

„Serapions-Brüdern“ 1819-1821

E.T.A. ホフマン Ernst Theodor Amadeus Hoffmann (1776 - 1822)

物語の舞台

ドイツのある都市 市民階級の家庭、シュタールバウム家

主な登場人物

父親(医務官) 母親 子ども達:ルイーゼ、フリッツ、マリー(7才)

子ども達の名付け親のドロッセルマイアーおじさん(上級裁判所判事) おじさんの甥

くるみ割り人形 おもちゃの人形 砂糖菓子の人形 蜂蜜入りクッキーの人形

七つ頭のネズミの王様 たくさんのネズミたち

固いクルミの話

王様 お后様 ピルリパート姫 宮廷に仕える人々

の登場人物

宮廷に住むネズミの女王:マウゼリンクス夫人 その7人の息子 親族のネズミたち

宮廷時計師のドロッセルマイアー 宮廷天文学者

ニュルンベルクに住むドロッセルマイアーの従兄弟 その息子

あらすじの中での省略 D1 ドロッセルマイアーおじさん D2 時計師ドロッセルマイアー M マウゼリンクス夫人

12/24 晩	客間	子どもたちは、両親から、服、馬、おもちゃの兵隊、人形、絵本などのプレゼントをもらう。名付け親のドロッセルマイアーおじさん(D1)からは、手作りの機械仕掛けのお城。D1は、顔や手足を金色に塗ったトルン製の蜂蜜入り菓子の人形もくれた。マリーがクルミ割り人形を見つけ、父は「お前が大切に、かわいがる」ように言う。フリッツが固くて大きなクルミばかりを割らせたので人形の歯が欠けてしまう。マリーはくるみ割り人形を優しく介抱。D1は、こんな不細工なチビにどうしてやさしくするのかとからかう。
12/24 真夜中	居間	子供たちはプレゼントのおもちゃをガラス戸棚に入れる。マリーは、一人でクルミ割りを看病。ふくろう時計が12時を打つ。時計のフクロウはD1に変身。ネズミの大群が出てくる。床下から王冠をかぶった七つ頭の大ネズミが現れ、マリーがよろけ、ガラス戸棚が割れる。戸棚の人形たちが動き出し、クルミ割り人形も起きだして、おもちゃの軍隊を指揮。ネズミが攻勢をかけ、クルミ割りは予備軍を召集、蜂蜜入り菓子の男女も登場。七つ頭のネズミの王がとうとうクルミ割りを追いつめ、マリーは夢中で靴をネズミ軍団に投げつけ、靴はネズミの王に命中。マリーは、そのまま気を失って倒れる。
25日	マリーの寝室	マリーは、ガラスで負ったけがの治療のためベッドで過ごす。D1が見舞いに訪れ、修理したクルミ割り人形を持参。「クルミ割り人形」の一族がなぜ醜い姿になったのか、由来譚を語り始める。
昔々	ドイツのある国	ある国の王様が、后が作るソーセージを食べる宴会を計画した。ところが、城に住むMとその一族に、ソーセージにいれるベーコンをごっそり食べられ、宴会は失敗に終わる。王はネズミへの仕返しのために、宮廷時計師兼秘薬調合師D2を呼び出す。D2の作った罠で、Mの7人の息子を含む多くの一族のネズミが捕まり、殺される。Mは、後に復讐のため生まれてくる王女を食いちぎると宣言。美しいピルリパート姫の誕生。生まれたときから歯があり、総理大臣の指にかみつく。王妃は昼夜、猫を抱いた6人の女官を王女に張り付けて見張らせる。女官たちが居眠りしている間に、Mが姫を襲い、「醜い姿」に変えてしまう。異様に大きな頭、小さな体、飛び出した緑の目、耳まで裂けた口、D2は、姫を元通りにするよう命じられ、分解してみるが治す方法が見つからない。

		<p>姫が好んでクルミのからを割りながら食べることに気づき、宮廷天文学者の協力を得て、「クラカトゥクのクルミ」を食べさせれば、姫にかけられた魔法をとくことができると言上。クルミを割るのは、一度も髭をそっていない、長靴をはいたことのない若者との条件。王は、そのクルミとクルミを割る若者を探しだすように D2 と宮廷天文学者に命令する。二人は15年間世界中を旅したが成果はなく、最後に D2 の故郷ニュルンベルクを訪ねた。D2 はいとこの人形師を訪ね、いとこは数年前のクリスマスの時期に偶然手に入れた、とてつもなく固いクルミ(自分で金をかぶせた)を見せる。金をはがすとクラカトゥクと書いてあった。天文学者の星占いで、いとこの息子がクルミを割れる若者だと判明。城に帰ると、いとこの息子が「クラカトゥクのクルミ」をかみ割って、姫の魔法をとく。しかし、決められた通り若者が目を閉じて七歩下がる時に、M が足元に現れ踏み殺される。M の呪いで、若者は不細工なくるみ割り人形に変えられてしまい、姫に忌み嫌われる。天文学者は占いで、「若者が王になる条件は、M の息子の七つ頭のネズミの王を退治し、不細工な姿でも愛してくれる女性が現れることだ」と、予言する。</p>
12/31	居間	<p>マリーのけがは癒え、居間のガラスケースには再びクルミ割りも戻る。このクルミ割りこそ D1 が話してくれた、ニュルンベルクの若者だとマリーは気づく。D1 が、「クルミ割りを助けることができるのはマリーだけだ」と言う。</p>
1月になって まもなく	マリーの 寝室 居間	<p>マリーが寝ているとネズミの王が現れ、「サトウ豆とマジパンをよこさなければ、クルミ割りをかみ砕く」と脅す。マリーがあげると、翌晩は「砂糖人形とグミ人形をよこせ」と要求。それを差し出すと、次の晩はネズミの王に「絵本と洋服をよこせ」と脅かされる。マリーは、クルミ割りに「どうすればいいの」と話しかけると、「私にただ、剣を与えてください」とクルミ割りが話す。兄のフリッツに相談し、兵隊が持っていた剣をクルミ割りの腰に吊す。真夜中、クルミ割りは居間でネズミの王を剣で仕留め、七つの金の冠をマリーに渡す。</p>
真夜中にネズミの王が殺されたあと	人形の国	<p>その夜、マリーはクルミ割りに誘われ、ダンスにある父の毛皮のコートの袖を通り抜ける。そこは「人形の国」。氷砂糖の牧場から、クリスマスの森、蜂蜜入り菓子の村を通り、バラ色の湖を渡り、「お菓子の都」に着く。「ようこそお帰り、王子様」との呼びかけにマリーはびっくり。賑やかな都では、世界中からやってきた小さな愛くるしい人々が陽気に騒いでいる。夢のように美しいマジパン城から現れた4人の貴婦人は、クルミ割りの妹たちで、クルミ割りはマリーを「命の恩人」と紹介する。食事の用意を手伝いながら、クルミ割りが語る冒険物語を聞いているうちに、次第にすべてが遠のいていき、マリーは波のうねりに乗ったように、高く、高くと上がっていった。</p>
翌朝	マリーの 寝室 居間	<p>目を開けるとベッドの中。母に「人形の国」の話をするが、夢を見たのだと相手にされず、ガラス戸棚の所に連れて行かれ、そこに収まっているニュルンベルクの木の人形が、どうして動くのかといわれる。ネズミ王の7個の金の冠を見せると、両親からどこで手に入れたかと 問いつめられる。マリーは夢ばかり見ている空想好きな子供だと、みんなに思われる。</p>
数日後	居間 食堂	<p>ある日、D1 が居間で時計を修理していると、マリーが戸棚のくるみ割り人形に「あなたが本当に生きているなら、あなたを蔑んだりしないわ」と話しかけ、途端に椅子から落ちて気を失う。気がつくと、D1 とニュルンベルクからやってきた D1 の甥の若者が立っていた。若者は、食卓でクルミを口に加えると、左手で三つ編みにした髪を引っ張り、割ってみせた。マリーと若者がガラス戸棚の前で二人だけになると、彼は「醜い姿になってもさげすまないと 言うてくださったおかげで、元の姿に戻ることができた。自分はマジパン城の王なので后として一緒に国を治めてほしい」と言った。一年後、若者は金の馬車でマリーを迎えに来た。</p>